

- 声を読む - プルーストとホメーロスの場合

taksh : hew, carve, split, fashion, make, create, invent. p.p tashta
(マクドーネル『サンスクリット語辞典』第八版 オクスフォード大学出版より)

第一章 (プルーストの場合) - 固有名詞があらわすもの

『失われた時を求めて』の中には、小説のなかに書き入れるものとしては不思議なテーマがいくつかある。第一巻目は第一部が「コンブレ」、第二部が「スワンの恋」と題され、それに続く第三部は「土地の名前 - 名前」という奇妙なものである。別々の小説としても成り立つような三つのかたまりが『スワン家の方へ』という題にまとめられ一巻を構成している。これら前二部はほぼ量的に均等だが三部は極端に量が少ない。ガリマールの古いポケット版(一九六五)では、「コンブレ」部分は二一九ページ、「スワンの恋」は二三二ページであるのに対し、三部「土地の名前 - 名前」は五三ページにすぎない。

一九一九年、ゴンクール賞を受けた二巻目『花咲く乙女たちの陰で』(一九六六)は二部に分けられ、「スワン夫人の周辺」と題された第一部は二二二ページ、「土地の名前 - 土地」と題された第二部は二二三ページと、第一部、二部ともほぼ同じ量。第一巻と第二巻の最終部につけられた「土地の名前」という題は、内容量の違いはあるが、あきらかに照応している。そしてその共通テーマは「固有名詞」としての地名である。

「犬」のような普通名詞には言語学的に三つの要素が考えられる。一つは「イヌ」という音、二つ目は意味、そして三つ目はこの「イヌ」の実体(イヌと呼ばれうるもの)が多く実在するという事実である。二十世紀初頭の言語学者ソシュールは、言語記号(シーニュ)は音的要素(シニフィアン)と意味(シニフィエ)¹から成るが、この両者の関係は必然的ではなく「恣意的」(アルビトルール)なものである、と言明した。「イヌ」という言語記号に関して言えば、「イヌ」という音声映像が「犬」という概念に結ばれる必然性はない、というのである。ソシュールは言語記号の恣意性の証左として、同じモノが、言語が異なると違うように呼ばれること、また異なった言語が存在すること自体をあげ、

¹ ソシュールは最初、シニフィアンを「音声映像」image acoustique、シニフィエを「概念」concept と呼んだ。

一例としてブフというシニフィエ（牛）が国境の一方ではブフ、もう一方ではオクスとまったく違った風に言われる²、と述べた。二十世紀中葉のフランスの言語学者エミール・バンヴェニストは、この言語記号の恣意性というソシュールの有名なテーゼに対し、偶然性が存在するのは、名（シニフィアン）と対象（レフェラン）との間であり、シニフィアンとシニフィエとの間の関係は必然である、と主張した³。

ここは、この論議に深入りする場ではないが、「音声」「概念」「対象」の三要素が考えられる「犬」のような名詞に対し、固有名詞は「概念」があいまいでも、音声と対象が結びつくだけで立派に機能する点で普通名詞とは異なる。一方、「希望」や「おそれ」のような抽象名詞と呼ばれるものは、対応する実体（対象）が明らかではなくとも音声と概念とが人の頭のなかで結びつく。「平和」を表現するさまざまな像が作られたり、「夢」を表す多くの絵が描かれたりするのには、この抽象名詞の対象はモノとしては実在せず、存在するのはそれぞれの人の想像の中だけだからである。

「イヌ」という音声映像と現実の一匹のイヌ（対象）の間にはなんら必然性はなく、その関係は恣意的と言えるが、この恣意性は、音声映像と概念との間には成り立たず、イヌという音節と「イヌ」の概念との関係は日本語の環境では必然である、というのがバンヴェニストの考え方である。言語学者ヤコブソンは、プラトンの『クラテュロス』⁴以来続く、名と対象間の恣意性および必然性について、『音と意味に関する六章』の終章でバンヴェニストも引用しつつ、つぎのように述べている。「一つの音素そのものは何も意味しない。（…）ところでこの空白は満たされようとする。音と意味との緊密性は語り手に、この外的関係を内的関係によって補完しようという気持を起こさせる」⁵。

『失われた時』の特に前半において主人公は、固有名詞、とくに実際の地名あるいは作者が創造した地名（とその対象）に対して異様とも言える関心を示している。この主人公の興味は、初めはコンブレの司祭によって、後にブリシ

² *Cours* 1960 Paris éd. Plon pp. 97 à 100

³ *Nature du signe linguistique in Acta Linguistica I* 1939 Copenhagen

⁴ モノの名前とそれが表す実体との関係は、「慣習による（恣意的）」（ヘルモゲネスの主張）のか、「自然（必然的）なもの」（クラテュロスの主張）であるか、という論に、ソクラテスがそれぞれ折衷的思考を述べている。語源の可能性と限界とが哲学史上はじめて体系的に示されたもの。

⁵ 一九四二年、ニューヨークにおいてフランス語で行われた講演記録 *Six leçons sur le son et le sens* 1976 Paris éd. de Minuit. p. 118

ヨという名のソルボンヌの教授によって満たされるが、こうした土地の名に関する想像は、言語学的に言えば、地名の概念の不在を想像で埋めようとする自然な心の動きであったと言える。土地や町、山、河といった具体的対象とは固く結ばれているものの、「概念」のはっきりしない音の連続（固有名詞）に接する人は、なんらかの合理的に思える概念を創り出してその空白を埋め、もともと概念をもった普通名詞に近づけて安定化させようとする。

この小説を貫いている一つの大きなテーマは「想像」と「現実」、文学的に言えば「幻想」と「幻滅」である。しかしこの二項の転回で物事が終わってしまうのではなく、「現実」や「幻滅」からまた新しい「想像」や違った「幻想」が生まれることもある。こうして小説中の主な登場人物は時間の経過とともに、違った姿で現れる。ジルベルトとアルベルチーナも、スワン夫人も最終的、決定的な姿で現れることはない。アルベチーナは主人公の中では死後も姿を変える。『失われた時』の本質は記憶と時間ではなく、シーニュと真実である⁶と述べたドゥルーズのことばはこうした脈絡のなかで理解される。

この長編小説は当初これほどの長さには想定されていなかった。驚くべき長編になったのは、作者の思惑が最初からあったのではなく、第一巻の出版（一九一三年）後に勃発した戦争（第一次世界大戦）によって、続く出版が困難になったからである。一九一四年から四年間続いた戦争は、小説の構成に大きな変化をもたらすことになった。作者はその間、原稿に手を加え、推敲を重ねて当初考えていたよりはるかに大きなものにしてしまったのである。

さまざまな現象のうちにひそむ真実を追い求める、という意味でプルーストはすぐれて哲学的・科学的な作家である。彼は一九一三年、自費で第一巻『スワン家の方へ』を出版する前に、出版予定の原稿（将来の『失われた時を求めて』）の内容を三分し、一部「名前の時代 l'Age des noms」、二部「語の時代 l'Age des mots」、三部「物の時代 l'Age des choses⁷」と名付け、この題名についてある友人⁸あての手紙のなかで同意を得ようとしている。「語の時代」、「物の時代」と

⁶ Gilles Deleuze : *Proust et le signe* 1976 Paris P.U.F p. 111

⁷ André Maurois : *A la recherche de Marcel Proust* 1949 Hachette. 2003 Paris Mémoire du Livre p. 311. 日本語版（筑摩・井上・平井訳）では、それぞれ「名の時期」、「言葉の時期」、「物の時期」。

⁸ Louis de Robert (Philip Kolb) : *Correspondance Marcel Proust* vol XII 1984 Plon p. 232

いう表現に作者のどのような意図があったのか詮索の余地があるが、『スワン家の方へ』の第三部と『花咲く乙女たち』第二部に冠せられた「土地の名前」という同一の題名が「名前の時代」というテーマに直接関係していることは容易に推測できる。主人公と友人のブロック⁹はお互いに「先生 *cher maître*」と呼び合った時代があり、それを「名付けるモノを創り出せると思い込んでいる時代」¹⁰と作者は呼んだ。これが「名前の時代」を説明している部分と思われる。意味もなく用いられた呼びかけ用の「先生」は普通名詞より固有名詞に近い。

固有名詞についてのプールの幻想の根は深い。普通名詞的な意味を欠くゆえに、名のまわりに様々な幻想を惹起する見知らぬこの地名の正体はなにか。貴族名の小辞「ド」のあとに置かれた固有名詞（地名のことが多い）の本質はなにか、ということを主人公は自問する。彼は女中のフランソワーズのように古くからのフランス人ではない。多くの友人のように貴族階級に属しているでもない。ブルジョワの主人公マルセルは土地との強いつながりを欠いているのである。あの長編を書いた人物は、自分をとりまく社会や人間の真実が、心の奥底のところでは、自分とはちがう他者のものとして映る人間だったのではないか。彼の「真の不安は自分の属する民族に関するものであった」¹¹と主張する批評家もいる。主人公は作者の不安を共有している。

地名にしる人名にしる、固有名詞に、普通名詞には当然のごとくに考えられる「意味」を感じる必要はない。「東京」が固有名詞として機能するためには、この語源的意味（「東」の「都」）を理解している必要はまったくない。「パリ」に「パリジイ族」というケルト民族を想起する人間はほとんどいない。しかしこの二つの都市は「一国の首都」という意味が共通している。だれでも知っている固有名詞にこうした後の意味が付け加わり、それが（首都）という意味で肥大化して用いられることが多くなれば、東京とかパリという名詞は固有名詞であることをやめ、普通名詞化したといえる。

固有名詞の普通名詞化はどの言語でも起こりうる。ケ・ドルセイ *Quai d'Orsay* という地名はフランス外務省の代名詞であり、ギロチンとかプベル（ゴミ箱）、シルエットというフランス語はこうした器具、あるいは描写方法を考案した人物の名前から来ている。日本語にもこうした例（霞ヶ関 = 官庁街、種子島 = 長

⁹ ブロックはユダヤ名。

¹⁰ *Du côté de chez Swann* 1965 Paris Gallimard, Livre de Poche p. 109。以後『失われた時を求めて』の引用にはこの版(1965-1967)を用いる。

¹¹ André Vial : *Proust* 1971, Paris, Nizet

銃、八百長 = なれあい勝負) は少なくはないが、固有名詞を普通名詞、あるいは形容詞として使う傾向はなぜかフランス語の方がはるかに多い。日本は学校に番号を付けて一般化した時代があったが、フランスでは今でも人名をつけて個別化するのがふつうである。人名が付けられた学校は多かれ少なかれ、その人物の力を自己のなかに取り込むことになる。番号で示された学校は、個別の学校の枠を越えたより大きな秩序の中の一つであることを示すことができる。

土地の名前は、たとえ今は忘れられているにしても使われはじめた頃は、命名のいきさつとかいわれといった、いわゆる何らかの《意味》があったと思われる。しかし実体をさす記号としての固有名詞の働きに意味は必須のものではなく、時にこれは対象認識の邪魔になることさえあり、次第に忘れられてくる。その後、その実体としての土地が持ち始める別の意味（寒村、あるいは繁栄した都市）が、地名の忘れられた意味の空白を満たすようになる。こうなるとなおさら元の意味は忘れられるか、あるいは新しい意味に完全に換置されてしまう。その結果、固有名詞をもとにした語が固有名詞として使われ続けても、普通名詞化してしまっても、語の意味の正統性は不安定であり続ける。

ブルーストが一時、自分の作品を三部に分け、それぞれ「名前 noms の時代」、「語 mots の時代」、「モノ choses の時代」と名付けようとしていたことについて、ジェラルド・ジュネットは、名前 nom の示しているものが「固有名詞」であることは認めた上で、語 mot に関して、これは普通名詞 nom commun として解されるべきではなく、個々の登場人物の性格や立場などを表す「ことば」parole¹²でなくてはならないと述べている¹³。しかしこの解釈では一巻「固有名詞」noms と三巻「モノ」choses との対比が見えにくくなるような気もする。「名前の時代」、「ことばの時代」、「モノの時代」というタイトルのなかの、名前 noms、ことば mots、モノ choses の意味は、記号に考えられた三つの要素、すなわち「シニフィアン（音声映像）」「シニフィエ（概念）」「レフェラン（対象）」に対応したもの、つまり nom とは、意味部分を想像で埋めても差し障りのない固有名詞、mot は意味部分に想像の入り込む余地があまりない普通名詞の使用で特徴づけられる人の「コトバ」と解したい。

¹² これは明らかに langue（規範言語）に対する parole（個別言語）という、ソシュールの意味である。

¹³ *Figures II* 1969 Paris éd. du Seuil pp. 248 à 249

言語学の仕事は、音と意味の接合面にある¹⁴とソシュールは述べたが、意味を支える形態（音・聴覚映像）に敏感であった『失われた時』のプルーストの仕事も言語学者のそれと同じ地平にあったと言える。

固有名詞とはある空間的固有の実体を慣習的に指し示す音声である。前に述べたように、固有名詞においては、言語記号にふつう想定される意味は重要な要素ではない。しかし固有名詞も言語記号である以上、意味の空白部分には、そこを埋めるべき想念が呼び込まれる。『失われた時』の若い主人公マルセルにとって、自分が訪ねて見たいと思っているイタリアのパルムの町の、自分を多分受け入れてくれる家が「すべすべして、コンパクトで、薄紫色をし、やさしげで、イタリアの他のどの町とも異なっている¹⁵」ように思えるのは、その家を「パルムというこの重々しい音節だけをたよりに想像していた¹⁶」からである。凱旋門の近くの「ボワ（森）」通りで見かけたスワン夫人の服装は、いつも違っていたが、思い出すのはとくに紫色。手に持つ薄紫色の閉じた日傘を時折見る彼女の目はまるで「パルムのすみれの花束¹⁷」を見るような幸せでやさしそうな視線であった。

プルーストは「パルム」のような地名を時には実際に発音していたことは間違いないだろうが、こうした描写をするにあたって改めて声にしていたと想像してみる必要はない。声を実感するために実際には頭のなかに描かれた聴覚映像を思い浮かべることで足りる。定着した音的映像はさまざまなことばで形容することができ、文章化することができる。逆に、聴覚映像を結ばない、つまり音韻化が不能の音声を文章化することは不可能である。音とことばの根源的な関係がここにある。文学的音声であるためにはその音声が真実性のある《意味》を持たねばならない。音声は《真実性を持つ》、ということは幻想にしる現実にしる、《真実性のある意味を持つ》ことにほかならない。

『失われた時』に「バルベック Balbec」という現実にはない地名がある。若い主人公が祖母といっしょに毎夏でかける海岸の保養地の町の名前である。プルーストは人名にしる地名にしる、重要なものは創造した名前を用いる。ゲルマント（Guermantes）という貴族名は、昔存在したが今は絶えてしまっているこ

¹⁴ *Cours* 1960 Paris Payot p.157

¹⁵ *Du côté de chez Swann* p. 463

¹⁶ 同右。

¹⁷ *A l'ombre des jeunes filles en fleurs* p. 221

とをプルーストは確認した上で使用した。コンブレ¹⁸もドンシエール¹⁹も作者が創出した地名である。この小説のなかの地名としてパリは最重要の固有名詞だが、前述したようにパリには様々な意味がこびりついている、いわば多くの意味的垢がついていて無償の幻想を生み出す源泉にはならない。

「土地の名前」と題された『スワン家の方へ』第三部の冒頭は、これまで不眠の夜を過ぎた数々の部屋のなかで、コンブレの部屋に最も似ていない部屋としてバルベックのグランドホテルの部屋を思い浮かべるところからはじまる。内陸に位置し、家庭的、カトリック的、閉鎖的コンブレにたいし、『花咲く乙女たち』と主人公との交遊が展開するバルベックは、海岸の開放的な明るい土地柄である。このバルベックに向かう、パリ午後一時二十二分発の列車の途中停車駅の町の名前が述べられる。バイユー、クータンス、ヴィトレ、ケスタンベール、ポントルソン、バルベック、ラニヨン、ランバル、ベノデ、ポンタヴェヌ、カンペルレと呼ばれるこの列車の停車駅のほとんどは、フランス北西部（ノルマンディ・ブルターニュ地方）に実在する町である。バルベックという架空の名前はこうした地方性に満ちた実在の町の間ひっそりと滑り込まされていた。プルーストはこのようにしてバルベックという、現実にはない町の名前のフランスらしさを演出したのである。

コンブレの隣人²⁰の話から、主人公はバルベックをロマネスクの寺院が荒海の波に洗われているロマンチックな場所と想像していたが、この幻想はその場所に行ってみる（実体に接する）ことで簡単に消え去ってしまう。実際は寺院と海とは数里も離れていた。パルムについても同様で、この地名を名にもつ女性（パルム大公妃）の容姿を前にしては、「すべすべして、コンパクトで、薄紫色をし、やさしげ」なパルムの家を頭の中に描くことはもはやできない。主人公は次のような感慨を抱く。「名前は気まぐれな画家である。人や土地について、あまりに似ていない絵を私たちに描いてくれるので、想像された世界のかわりに可視の世界を目の前にすると、しばしば一種啞然とした気持ちになる」²¹。

地名の意味を求めて作者は別の方向からの接近をはかることになる。

作者はバルベックという自分で創り出した名をさらにフランスの地名らしくするため、ソルボンヌの教授ブリショにバルベックの名前の由来を主人公に尋

¹⁸ シャルトル近郊の村イリエ（プルーストの父の出身地）がモデル。

¹⁹ 主人公の親友の軍人サン・ルーの駐屯地。オルレアンがモデル。

²⁰ スワンとルグランダン。

²¹ *A l'ombre des jeunes filles en fleurs* pp. 128 à 129

ねさせる。「バルベックはおそらくダルベックが変化したものでしょう。ノルマンディの宗主だったイギリス王家の勅許状を見なくてはなりませんね。というのは、バルベックはドーヴァー男爵領に属していたので。それでしばしば海外領バルベックとか、大陸バルベックとか呼ばれていましたから」²²。

半ユダヤ人のプルーストは、地名に単なる記号を越える意味を求めていたことは確かである。非ユダヤ・ブルジョワ・カトリック家庭の子弟として提示されている主人公マルセルは、フランス国籍を取得できるようになって百年も経たない民族につながる作者の、土地に対する定まらない気持ちを共有しているように見える。ユダヤ人は十九世紀まで、農業、公職、神職、軍職に近づくことは許されず、土地の所有からは閉め出されていたのだ。

ブリショ教授の術学的説明は続く。「ベックはノルマンディ方言で（川）。…ダルは *thal*（谷）の一つの形²³。」プルーストはフランス地名学のオーギュスト・ロンニョンの講義をソルボンヌで聴講した可能性があり、またその際のノートを利用したことも考えられる、とある言語学者²⁴は推定している。地名を構成する音節からその名の本質を問うことから始まり、さらには語源学という、語の真実²⁵の探求方法としては客観的で合理的だが小説に載せるにとしては異様とも思える専門分野に作者は入り込んでいる。しかし地名幻想がその場所への実際の接近で消え去るのと同じく、この語源学の知見も幻想を豊かに広げるものではない。しまいには語源学には幻想の花をしばませる効用しかないことがわかる。「私はフィクフルール（…）のようなある種の名前の語尾にあるフルール（花）をかわいらしいと思い、またブリックブフの語尾のブフ（牛）を面白いと思っていた。ところがブリショから（…）フルールは港（フィヨルド）であり、ブフはノルマンディ語でブド（小屋）であると教わってからというもの、花も牛も消えてしまった。彼はいくつも例を出したので、特別だと思っていたものはありふれたものになってしまうのだった。」²⁶

固有名詞へのプルーストの一時的傾倒からわれわれは、本来普通名詞的意味

²² イギリス側からの命名。 *Sodome et Gomorrhe* p. 337

²³ 同右 p. 338

²⁴ Joseph Vendryès : *Marcel Proust et le nom propre* in *Mélanges Edmond Huguet* 1940 p. 125

²⁵ 語源学 *étymologie* の語根 はギリシャ語の形容詞 *étumos*（真実の）。

²⁶ *Sodome et Gomorrhe* p. 497

を欠く固有名詞の音声部分に、主人公がふだんのような意味を持たせようとしていたか知ることができる。貴族階級には属していないにもかかわらず、その階級に受け入れられていた主人公にとって、貴族性そのものであった「ゲルマント」という貴族名をゲ・ル・マ・ン・ト、と分節²⁷し、この音節の貴族性のゆえんを若いマルセルは考えた。判明したことは、「ゲルマント」という音節それ自体が貴族性を持っているわけではないことである。「音素そのものは何も意味しない」。しかし「この空白は満たされようとする」のである。意味を持たない音節からなる固有名詞は、それが通用する環境においては、意味を欠くからなお一層もどかしげな喚起力が生じる。固有名詞の力は普通名詞的意味の欠如から生じるのである。

主人公は、固有名詞の持つ力が現地への旅行とか語源学の知見でたやすく消え去ることを思い知る。このことはつまり固有名詞の意味とは、それぞれの音節ごとの意味の空白を埋めているその言語特有の色、あるいは匂いに似たものであるということだ。この色あるいは匂いという感覚と、旅とか語源学という合理的、論理的認識とが合流することはないのである。固有名詞にはことばで説明できる、つまりテキスト化できる概念というものはない。

『失われた時』には物語の筋にかかわる説明や、作者の思想に直接つながる開陳は少ない。この小説は一言で言えば、「十九世紀末から二十世紀にかけてのフランス研究」²⁸である。この「フランス」にはフランス社会、フランス人、フランス語が入る。挿話はたくさんあるが、小説の話の太い筋はよく見えない。

第二章 (プルーストの場合) - 声が変わるもの

テキストの語根であるサンスクリット語動詞 *taks* の過去分詞 *tasta* には、書かれた(もの)という意味はない。書く、という行為が存在しなかった頃にできたこの動詞は「削る、装う、編む、削る」を意味した。この意味では「テキスト」は手作り作品、料理であり、服装であり、編まれたものである。テキストは装い、声はひたすら顕現する。

『失われた時』の主人公は固有名詞の力の解明につとめていた頃から、人の言

²⁷ 実際の分節は *Guer/man/tes* で三音節あるいは *Guer/mantes* の二音節。

²⁸ プルーストの視点はパレスチナ生まれのイギリスの社会学者 *Theodore Zeldin* (1933 -) のフランス研究 (『フランス情念史』) のそれと似ている。

葉の内容よりことばの表現形態に強い興味をもっていた。プルーストは人の口まねがうまかったことが知られている。口まねをうまく行うには、人の言葉の内容より、発音のくせ、抑揚、イントネーションといったといったことばの外形的特徴をつかむ能力が必要である。

外務省のヴォグーベール氏（男色者）の声を初めて聞いた主人公の感慨。「医者は診察する病人にシャツを上げさせたり、呼吸を（聴診器で）聞いたりする必要さえない。声で十分なのである」²⁹。

またシャルリュス男爵にかわいがられている音楽家（バイオリン）のモレルはエゴイストで、つねに気取っているがじつは野卑な人間であることが声から知られる。許嫁である上流階級の若い娘に下品な言葉で怒鳴りちらしている彼を聴く作者の評は酷い。「モレルは大声で怒鳴っていた。この怒鳴りから、これまで私が彼に知らなかった訛りが出ていた。ふだんはおさえられているが、百姓の訛り、実に奇妙なものだ。ことば遣いもこれに劣らず奇妙なもので、フランス語の点で間違いだらけ。この男の知識はすべて生半可なのだ。」³⁰

文章でしか知らなかった作家ベルゴットにスワン家の夕食会で初めて会い、その言葉に接した主人公は次のような感想を抱く。「彼はじっさい奇妙な器官をもっていた。ある考えを含んでいることほど声の質を変えてしまうものはない。二重母音の音質、唇音の力がそれに影響される。発音の仕方までそうなる。彼のしゃべり方は彼の書きぶりとはちがひ、また彼の言っていることは彼の著作を満たしているものとはまったく異なっているように私には思えた。しかし声は、文体のなかにむきだしに見せた顔とは最初声からは気付かないような仮面から発せられる。」³¹ 作家の卑俗な声と話の内容に失望した客はそれぞれ帰途につく。その間、この声とテキストとの乖離について主人公は意外な結論を導き出して作家を弁護するのである。天才とは、他人より劣った卑俗な属性を高貴な次元に転換できる能力なのだ。空中を飛ぶためにはもっとも強力な車を持つ必要はない。必要なのは地面を走り続けるのをやめ、その水平線を垂直線で切って、水平の速度を揚力に転換できる車である。こうしてベルゴットは、ついでにた離陸に成功できたばかりの小さな飛行機で、人の卑俗さを嗤って

²⁹ *Sodome et Gomorrhe* p. 67

³⁰ *La prisonnière* p. 174

³¹ *A l'ombre des jeunes filles en fleurs* p 130

帰宅する客たちの、地上のロールスロイスを追い越すのである。ベルゴットの声とテキストは相反しているように見えるが、彼の美しいテキストは転換されるべき彼の卑俗な声を必要としていたのである。

声と真実という、次元の違うように見えるものは実は密接に関係している。サニエット氏は古文書学者。内気で謙虚、善良であるがゆえの厄介者。大金持ちで生まれも育ちも申し分のない学者でありながら、顔を出すあらゆるところで軽くあしらわれている人物である。「彼はしゃべるときに口の中になにか柔らかいかたまりのようなものを含んでいた。それがかわいらしいのは、ことば(舌)の欠点というより、まさに魂の長所、決して失わなかった幼年時代のあどけなさのなごりのようなものをあらわしていたからだ。彼には発音できないすべての子音はすなわち、その数だけの、彼にはできない冷酷な行為であるかのようだった」³²という作者の最初の描写はやさしさに満ちている。しかし古文書学者という、テキスト中のテキストの専門家は古い文書は読めても現在の話し相手に自分のことばを届かせるのに苦労し、かつ、この相手の「声」を読むことができないことが判明する³³。古文書同様、人間関係の縦糸横糸に常に強い興味をもちながら、人に遠ざけられるサニエットは哀れである。

音楽教師ヴァントゥーユ氏にはこのような残酷なほどの分析に堪えうるような肉声は付与されていない。今風の若者の放恣に厳しく、ことば少ないこの寡夫は、愛娘とその「悪い」女友だちの所行(同性愛)とその評判とを気に病み、衰弱死してしまう。しかし生前作曲家として「ソナタ」一曲しか知られていなかった彼の真実の声(記譜)は、彼を苦しめた娘の悪友、音楽好きだった女性の献身的読解作業でテキスト(楽譜)としてよみがえる。彼の書き留めた声が、苦悩の種だった人物によって楽譜に転換され、彼は不滅の栄光を得る³⁴。

と、簡単に述べたが、サニエットのことばの不幸もヴァントゥーユの死後の栄光も、実感するためにはこの小説をあらかた読まねばならない。『スワン家の方へ』から始まるヴァントゥーユ家のエピソードは小説全編にその断片が散らばっているが、このエピソードのヴァントゥーユ嬢あるいは彼女の悪友をプル

³² *Du côté du chez Swann* p. 243

³³ *Sodome et Gomorrhe* pp. 422 à 424

³⁴ *La prisonnière* p. 279

ースト自身に、ヴァントゥーユ氏をプルーストの母親になぞらえて読むことができる。いずれにしてもこの音楽家ヴァントゥーユ家をめぐる挿話は作中もつとも感動的なものの一つである。「失われた時」は「無駄に過ぎた声の時代」であった。ヴァントゥーユの仕事ぶりを知悉していた「悪友」が、友の父の残した解読不能の音譜を純化した魂でテキスト化したように、プルーストは自分の無益な声に満ちた過去を、中世の修行僧のように刻苦してテキストに変え、その作業で亡き母の悲しみをあがなったのである。

信心深いレオニー叔母。コンブレの家の二階の一室だけが行動範囲であり、しかもふだんは病床にいながらも彼女は、隣国のミス・マーブルのように、内外のあらゆることに精通している。彼女の人生の真実は細々した悩みや喜び、体の不調、病床で得ることのできるさまざまな情報からなるのではない。こうした些事を材料に、声を交わすことのできる相手（女中フランソワーズ、寺女ユーラリ、主人公のマルセル。やんわりと敬遠されている村の司祭など）がいることがもっとも肝要なことなのだ。人に自分の声を届け、その人から声の反応をうること。生きることの確認は彼女とそれぞれの相手との間で、声でなされる。この内容（意味）のない声の交換は、聞き手につねに決まった反応を呼び起こす固有名詞だけの会話に似ている。だが真実は内容の無意味さのなかにある。二階の彼女の部屋ではほとんど固有名詞化したことばが飛び交う。しかし他者には無意味に聞こえるこの声の情報網から彼女は、女中フランスワーズの人格の二重性という、他者の知らない、人の真実をつかんでいるのである。

登場人物のことばへの注意は貴族・ブルジョワの主人階層だけに向けられているのではない。他の階層の人間にも同じような注意が払われる。特に主人公の家の女中頭、フランソワーズ（彼女のモデルは出身地の違う数人）は、その発することばがもっとも注目されている一人である。

プルーストは「フランスの声」にほかならないフランス語が、自分の母方の先祖の人々の古くからの所有であるとは考えていなかった。彼のフランス語への飽くなき探求心の根底にこうした前提を置いてみることができる。フランス（人）とフランス語の成り立ちについての彼の知識は現在の観点からするとかなり古びたものだが、その概要は正しく把握しているし、当時生まれつつあっ

た言語地理学³⁵的な考え（古い形は地方に残る）も理解しているように思える。また、同一人物が次々に名前を変えたり（オデット - スワン夫人の場合）、一つの名前が違った人物に付いたり（「ゲルマント夫人」の場合）、彼の人物描写はソシュールの言語記号の恣意性のパロディーの観さえある。言語とは、当時のドイツ言語学の主張する、成長する有機物ではなく社会機構の一つであるという考えはソシュールよりさきに一八七〇年代アメリカの言語学者ホイットニーの仕事³⁶のなかですでに提唱され、ヨーロッパには知られていた。

先住民族であるガリア人（ケルト語）がローマ人（ラテン語）に征服され、その上にフランク族（ゲルマン語）がかぶさったというのがフランス語形成の大要である。これによればフランソワーズは先住民族ガリア人（被征服者）の系統をひき、中世からの大貴族ゲルマント家（親友サン・ルー、シャルリュス男爵含む）は征服階級としてのフランク族の典型である。この構図の中で、ブルーストの母方の民族はこの三つの要因のどれにも属さないどころか、フランス国籍を得ることができるようになって百年も経っていない。この作者が、ガリア人でもフランク族の末裔でもないとして提示された主人公の姿に反映されないわけがない。主人公はフランス先住の人たちの用いるフランス語を、敬愛すべき「他者の言語」として観察しているのである。西洋の言語学者にユダヤ人が多いのはゆえのないことではない。バンヴェニストもヤコブソンもユダヤ人。『音と意味に関する六章』の前書きを書いたレヴィ・ストロースしかり。

貴族とは常にパリの山手に住んでいるのではない。特に古くからの貴族の多くは一年の半分は田舎の領地に帰り、そこの農民と話をするのだから、かれらの言葉はパリしか知らないパリジャンのそれとは違うのである。ゲルマント夫人は農民と同じようなしゃべり方をする。「私はバカだから ... あらお百姓さんのような言い方ね」³⁷。この部分は是非、注を見てもらいたいが、「バカだから、お百姓さんのような言い方をする」あるいは「私、バカだから、これ、お百姓さんの言い方ね」という意味ではなく、バカ *bête* に付くべき女性不定冠詞 *une* 「yn」を [œn] (*eun* とイタリック表記) と発音したので、その発音が農民風だということである。フランス言語地図の西部の巻をみるとトゥールの南東、

³⁵ スイス人言語学者 Jules Gilliéron (1854 - 1926) の創始になる。

³⁶ William Dwight Whitney (1827 - 1894) : *The Life and Growth of Language* 1975 *Language and its Study* 1876 Harvard, USA

³⁷ « ... moi, je suis *eun* bête, je parle comme une paysanne. » *La Prisonnière* p. 43

アンドル川流域の農民は不定冠詞 *une* を [œn] と発音している³⁸。こういう大事な部分の意味は翻訳では決して伝わらない。

フランソワーズは部分冠詞を用いず、*apporter / chercher d'eau* (水をもってくる) というが、これこそ古いフランスの言い方なのだ。固有名詞に夢中になったように、主人公はこのようなフランスの古い発音や表現に驚嘆する。大貴族はもちろん、料理人や召使いの多くは地方出身であり地方に根をもっているので、パリの邸宅で行われる料理、食事、社交といったことば以外の習慣も、本来パリのものではなく地方のものであることが多い。ものの言い方、歩き方、紹介のし方、され方、贈答、挨拶というような、物事の外側にこそ真実がある。

フランソワーズの言葉については、これまでいろいろなところで書いた³⁹のでこれ以上繰り返さない。ここで述べてみたいのは、レオニー叔母には見抜かれていた彼女の人格の二重性についてである。自分の娘や親戚にはやさしいフランソワーズが他人にはなぜ冷酷になれるのか。家の者にはおいしいお茶や鶏料理をつくってくれるのに、鶏を殺すときには、信じられないような野蛮な叫びをあげるフランソワーズ。人が生きるためにしなければならない仕事の全体像をまだ知らない主人公は自問するのである。新聞で、可哀想な事件を読んだときは涙をながすフランソワーズが、その事件の被害者を具体的に想像できるようになると涙はたちまち乾いて冷淡になるのはなぜなのか？

彼女の下で働く若い召使いが産後のある夜、ひどい腹痛を起こす。この症状をおそれていた医者是对処方法を確かめるため、家にあった家庭医学書を持って来るようにと主人公の母に言う。この症状のところにしおりを挟んでおいたのだ。母はしおり紐を落とさないように持ってくるようにとフランソワーズに

³⁸ 「(私はゲルマント夫人のことばを) あたかも古語で書かれた本を読むかのように聞いていた。(…) 古いことばや語の本当の発音は、現代作家の気の抜けた模作からではなく、ゲルマント夫人やフランソワーズのような人と話すことで知られる。(…) タルンではなくタール、ベアルンではなくベアールと発音すべきことは後者から教わっていた。」 (*La Prisonnière* p. 34)

「大貴族のある者は、(…) 共に暮らした庭師や百姓と同じように老いていた。茶色のしみが頬を覆い、顔は黄ばみ、本のように浅黒くなっていた。」 (*Le Temps retrouvé* p. 314)

³⁹ 古いものは「仏文学と南仏語 - プルーストの場合」『南仏と南仏語の話』(大学書林 1980年7月)の第五章(140 - 154ページ)。最新の小文は「ミシェル・ブレアル - 古代と現代とをつないだ言語学者」『言語文化』26号(明治学院大学言語文化研究所 2009年3月)。

命じる。すぐ戻ってくるはずの彼女は一時間しても戻って来ない。再び寝てしまったと思って腹を立てている母に、書斎に見に行ってきたと言われた主人公が行って目にしたのは、医学書のしおりを挟んだ箇所には描写された苦しむ病人に同情し、はらはら涙を流していたフランソワーズであった⁴⁰。

ここにあるのはテキストの属性である一般性への服従と、現実が求める個別性の優位の問題である。読むにしろ書くにしろテキストの扱いには必然的に第三者の目の介入があるのに対し、声による情報交換は基本的には対話による。

テキストには他者の目が内包されている。フランソワーズはこの医学書の恐ろしい症状、あるいは、新聞の可哀想な事件を「読む」ときは、他者の目で、他者と一緒に読んだのである。一方、階下で苦しんでいる若い召使いの現実には個人的な（やさしいあるいは冷酷な）「声」で対応すればよいのだ。声は他者の教示を必要としたり、人から矯正されたりすることはない。テキストは制約的一般的であるゆえに教化的側面をもっているが、声は本質的に社会的倫理的制約をうけない。一般的論理で守られたテキストは個別的眞実を隠し、したがってウソも厭わないのにたいし、そのような防御装置のない声は期せずして眞実をあらわしてしまう。声そのもののなかには、声の組み合わせで構成される「ことば」の意味を越える眞実があるのだ。

バンヴェニストは、三人称とは人称ではなく、非=人称である、と主張した⁴¹。確かに三人称代名詞と呼ばれるものの本来の機能は「人」称 *personne* を示すことではなく、モノを指示することである。あれ、これ、かれ、というものも指示代名詞であって人称代名詞ではない。この声の人称性とテキストの非人称性については、第三章において違う形で論じてみたい。

第三章（ホメーロスの場合） - 声のテキスト

叙事詩 *épique* の語源はギリシャ語 *epos* の形容詞形 *epikos*。 *epos*（言葉）はラテン語 *vox*（声）、梵語 *vacah*（声）につながり、複数形 *epê* も叙事詩を意味する

ホメーロスの二作品（『イーリアス』と『オデュッセイア』）⁴²を「声とテキス

⁴⁰ *Du côté de chez Swann*, pp. 147 à 148

⁴¹ *La nature des pronoms*, in *Problèmes de linguistique générale* 1 1966 Gallimard. pp. 251 à 257

⁴² 明治学院大学言語文化研究所で週一回の「ホメーロス輪読会」が始まったの

ト」という観点から見たとき、なにか具体的なことが言えるだろうか？「ホメーロス」が一人だったのか、あるいは複数だったのかということさえはっきりしていない。しかしたとえこれらの二作品が「ホメーロス」という名の一人の吟遊詩人がまとめたものであったとしても、長い間集団的に声で伝えられてきた多くの伝承がこの作品の土台になっていることは間違いがない。この「声」による伝承がどのようにして形成され、伝承され、またいつどのようにして文字で定着されたかということは明確には解明されていない。問題が多岐にわたるこのホメーロス考証は文学研究の原点であり、作品についての考証はとくにテキスト化されてからでもすでに二千年を越える歴史がある。

「テキスト」の原義は必ずしも文字によるものではなく、声によって定着されたものでも「テキスト」と呼べることは前に述べた。ここではいわゆる文字テキストではなく、声であれ文字であれ、こうした「編まれたことば」、「創り出されたことば」としての「テキスト」がもちうる別の問題を扱ってみたい。ホメーロス作品には文字テキスト以前に声のテキストがあった。

テキストという語はラテン語のテクストゥスにさかのぼる。「テキスト」が直接文字に結びついたのは中世から⁴³で、古典ラテン語時代の「テキスト」は書き記される記録以前の状態を示した。「刻まれたもの」「編み込まれたもの」「仕上げられたもの」、そしてまた今日「コンテキスト」という語で表される、テキスト外の状況も原「テキスト」の語義の範囲内だった。このラテン語はサンスクリット語の過去分詞 *tasta* にさかのぼる。この語の動詞語根 *taks* は文字（そのような記号があったとしても）が人間生活のなかでまだ大きな働きをしていなかった時代にできたので、この動詞は「書く」とか、「(文字を) 記す」という意味ではなく、当初は「刻す、削る、加工する、編む、創る」というような、「書く」行為以前の意味である。この動詞はギリシャ語では名詞の *tektôn* (木工細工師)、*technê* (技、術) といった語につながると推定されている⁴⁴。

は、一九八三年四月。現在『イーリアス』は終え、『オデュッセイア』の二十三巻を読み進めている。一年三十回。初期の一回五行から始まり、現在は一回四十行以上進む。二〇〇九年中に全巻読み終える予定。参加した人の延べ数は、海外からの参加者・講師を含め五十名を越える。

⁴³印欧語語学者ジャン＝ピエール・ルヴェ氏（リモージュ大学）による。

⁴⁴ Pierre Chantraine : *Dictionnaire étymologique de la langue grecque* 1980 Klincksieck vol II p. 1112

古典ギリシャ語で「テキスト、文字」に相当する語はサンスクリットの *taks* とは関係しない中性名詞 *grammata*⁴⁵である。この語と女性名詞 *grammê* 「線」の二つとも、もともと「引っ掻く」が原義の動詞 *graphô* の過去分詞である。英・仏語の *grammar*、*grammaire* (文法) はこのギリシャ語から生じた。

ホメロス作品は文字定着以前の紀元前八世紀前後⁴⁶にすでに声による定着が行われていたらしい。両作品の三万行弱のなかにはっきり「文字」とわかる語の用例が一例もないことは驚くべきことである。『イーリアス』の舞台となったトロイア戦争はミュケーナイ時代 (前十六世紀から前十二世紀末) の末期に起こったものとされているが、このころすでにペロポネーソス半島を含む東方地中海世界にはエジプト文字、ビブロス文字、ヒッタイト文字 (楔形文字)、キプロス・ミノア文字のほか、線文字 A・B などが存在し、そのうち二十世紀中頃になって解読された線文字 B は古いギリシャ語であることが判明している。それなのになぜ作品中に文字を示すはっきりとした例がないのだろうか？

アフリカに発した現生人類がかなり精巧な肉声言語を用い始めたのは今から数万年から十数万年前にさかのぼるとして、ことばのある種の視覚的記号化によっていわゆる文字が誕生したのは今から一万年以内のことだ。ところで一挙に神聖文字として出現し、強い宗教的意味をもったエジプト文字は別にして、文字の誕生はそれまでの肉声による伝達・伝承方法に革命的な変革を直ちにもたらしたのではない。ギリシャ語を表記したものであった線文字 B について言えば、粘土板に刻されていた文字内容は、王国内の生産物の流通、あるいは徴税・計算・奉納目録といった経済行政メモ的なものがほとんどで、歴史や詩歌、伝承といった文学的なものは皆無である。イギリスのヴェントリス・チャドウィック共著による『ミュケーナイ・ギリシャ語資料集』⁴⁷によれば、この粘土板記録の内容は主に行政記録であるため、地名や人名といった固有名詞 (とおもわれるもの) の種類は豊富だが、文章様式は短く変化に乏しい。しかもこの事務記録は一年後には破棄され、また新しい粘土板が作成されたという。ここに刻された文字は、一年に一度の大きな行政評定のためのメモ記録のようなものだったのではないか。つまり、線文字 B は本来肉声で行うべき業務の補助

⁴⁵ 「文字テキスト」の意味ではふつう複数で用いる。単数は *gramma* (文字)

⁴⁶ ブレアルは百年前、ホメロスの時代は前七世紀初め、文字によるテキスト化は前六世紀と推定した。 *Pour mieux connaître Homère* (1906 Paris Hachette)

⁴⁷ Ventris & Chadwick : *Documents in Mycenaean Greek* 1956 Cambridge Univ. Press

装置であったに過ぎない。記録メモ社会は同時にテキスト破壊社会でもあった。ホメロスが定着させた肉声「テキスト」のなかに文字への言及が皆無であることは、当時の社会の文字軽視の思想とでも言うべきものと通底していたのかもしれない。文字軽視、肉声重視の傾向は、文字が実際に使われるようになっても長く続いたものと思われる。ミュケーナイ文明はクレータ島で前十二世紀、大陸でもその後まもなく滅びるが、この線文字記録はギリシャ語を表記したものであることが早々に忘れ去られた結果、線文字 B は二十世紀になるまで解読されなかった。ついでに言えば、線文字 A の方はいまだに解読されていない。

ベレロポンテースの挿話⁴⁸の「テキスト」と「コンテキスト」

gramma (文字) という語が一切現れない⁴⁹ホメロス作品中に、唯一 これは文字ではないか、と思われる箇所がある。『イーリアス』第六卷百六十八行目にある *sêmata lugra* (不吉なしるし) という表現である。この表現は、トロイア側の英雄グラウコスと、ギリシャ側の英雄「声の良き」ディオメーデースとの間に行われた有名な「名告りと武具交換」に先立った、前者が自分の先祖を語る場面にある。「非のうちどころない」ベレロポンテース (グラウコスの祖父) は滞在する国の王、プロイトスの妻に誘惑されるがこれをきっぱりと拒絶する。恨んだ王妃は夫に自分を誘惑したのはベレロポンテースであると讒言する。怒った王は彼を殺そうとするが、貴人の殺害は「心に怖れるものがあって躊躇して」⁵⁰果たせず、彼に「禍々しきしるしを持たせてリュキエーに送る」⁵¹、「重ね合わせた板切れに、彼が死ぬよう、命を損なうべきことをる刻んだものを義父に見せるよう命じて」⁵²。この「(不吉な) しるし」を現代仏訳の多くはぼかして、「伝言 (メッサージュ)」、「記号 (シーニュ)」と訳しているが、はっきり「文字 (カラクテール)」としているガルニエ・フラマリオン版の訳もある。

用語 *sêmata* (*sêma* 「しるし」の複数形) について、ローブ文庫のマレー教

⁴⁸ この挿話については、拙著『声 - 記号にとり残されたもの』(一九九八年、白水社) 49 ページに別の観点からの記述がある。

⁴⁹ フランスのバイイによれば、*gramma* = 文字、手紙、としての最初の使用例は前五世紀の歴史家ヘーロドトス。

⁵⁰ 『イーリアス』六卷百六十七行

⁵¹ 『イーリアス』六卷百六十八行

⁵² 『イーリアス』六卷百六十九 - 百七十行

授⁵³は、「書記法が知られていたことを示唆するホメーロス唯一の例」と註釈しているが、フランスのピエロン⁵⁴は、前二世紀のアレキサンドリア図書館長であった有名なホメーロス注解者、アリストアルコスの意見を引用し、これは「象形文字記号。用いる者のあいだで決まった意味を持つ絵文字のようなものと思われる」と註釈した。しかしここではそれが文字であったか、使用者の間でのみ意味を推し量ることができる判じ絵のようなものであったかはさしあたって問題ではない。考えてみようと思うのは、こうした情報の間接的伝達方法としての「テキスト」が対話の基本的関係、つまり本来「われ」と「汝」という限られた二つの人称関係のなかに第三者を介入させる有様である。

この挿話の場合、妻の嘘を真に受けてベレロポンテース殺害を企むテキストを作成したプロイトス王と、それが刻まれた「重ね合わせた板切れ」を渡されたベレロポンテースとの関係は、はじめ、国の主人と優れた臣民という、対話によって結ばれた親密な関係であった。しかし妻の讒言に動転した者による第三者あての「テキスト」が生まれた結果、当初、遠方に在った妻の父（リュキエーの王）が、このテキストを通じてプロイトス王に直接結ばれ、今までこの王の声の相手だった者（ベレロポンテース）が、この二人の王同士の関係の外に置かれてしまうということが起こる。すなわち、テキストによってプロイトス王の意図を把握した遠方の第三者リュキエーの王は、躊躇なく娘の舅の計画の実行者となり、一方、第三者に追いやられたベレロポンテースはさまざまな難題をふっかけられて殺されようとする。文字であれ、絵のようなものであれ、意味を帯びた記号が声によって結ばれていた人間関係の親疎を逆転させたのである。勇者ベレロポンテースの運んだ「禍々しきしるし」とはこのような記号にほかならない。

目の前の相手を称揚するにしろ痛めつけるにしろ、肉声が届く範囲でなされる限り、本人はことばの報いをほとんど直ちに蒙る。すぐれた臣民を殺めることにたいし「心に畏れの気持ちがあった」のは、相手が目の前に存在するからで、目前の人間に対する敬意のこもった畏怖の心情は自然であり人間的だ。

声による伝達には、内容（相手と共通理解される）にしろ、伝えられる人数（声の届く範囲）にしろ、時間（同時代人に限る）にしろ、あきらかな肉体的、

⁵³ 初版一九二四年（ハーヴァード大学出版）。

⁵⁴ 初版一八六九年（パリ、アシェット）。

物理的限界がある。この限界こそ実際長い間、人間が人間性を逸脱しない歯止めとなっていた。一方、持ち運び保存できるテキストによるメッセージはこうした限界から解放されていて、テキストの作成者は、意図するならば、その責任をまったく逃れることさえできた。以来、人は簡便で持ち運び可能、保存も改変さえもできる文字の効用にのみ心を奪われてきたが、面前の相手を他人化しつつ遠い相手と結託できるテキストは、人はその力を意識しないので、なおさら禍々しく恐るべきものとなって行く。

テキストを運ぶ使者 - 『イーリアス』第九卷

ギリシャ側の老将軍ネストールには「ゲレーニオス」あるいは「ゲレーノス」という意味不明の形容詞がつくことが多い。「ゲレーニオス・ヒポタ・ネストール」という表現が頻出し、これを呉茂一は「ゲレーンの騎士ネストール」⁵⁵（岩波文庫旧版）、松平千秋は「ゲレニア育ちの騎士ネストール」（岩波文庫新版）と訳している。この形容詞は従来さまざま議論されてきたようだが、万葉集のかなりの枕詞がそうであるように、その意味について未だ定説はない。辞書には、今では素性のよくわからなくなった地名に結びつけた「ゲレニア人」「ゲレノス人」⁵⁶に結ぶものが多い。

二十七年にわたる我々のホメロス輪読会を一貫して支持、指導してきてくれた畏友ジャン＝ピエール・ルヴェ教授はこの形容詞の意味について、従来の地名起源説とはまったく異なった説を立てている⁵⁷。彼は「ゲレーニオス」という語の語根として、印欧語の「音をたてる、叫ぶ」という意味をもつ ger-（サンスクリット語の動詞語根 gr-）を想定し、これをギリシャ語のゲーリュス（声）、ゲーリュオマイ（声を出す、歌う、言う）と結びつけた。彼によれば「声を出す」（ゲーリュオマイ）のは「言葉によって事実を正確に伝える」ためであり、「ゲレーニオス」という付加形容詞はこれに関連して「声に真実をもつ」、「真実の言葉をもつ」という意味になる。こうしてルヴェ教授は、「（ネストールの知恵は）いわゆる知恵の原史時代の特徴である、純粹に口承的背景のなかに位置するものである」と結論した⁵⁸。

⁵⁵ 『イーリアス』二卷 三三六 この形容詞の呉茂一注には「この形容詞は極めて由来が古いものらしいが明らかでない」とある。

⁵⁶ 例えばバイイの「希仏辞典」（アシェット）。

⁵⁷ 工藤進『声』一九九八年、白水社 八三 - 八四ページ。

⁵⁸ 『言語文化』六号 一九九三年明治学院大学言語文化研究所。

ベレロポンテースの災厄の直接的原因は、プロイトス王の作った「禍々しきしるしが刻み付けられた板切れ」がプロイトス王妃の父に渡ったことだが、根本的な要因は、プロイトス王妃の「讒言」である。文字のあるなしにかかわらず盛んに行われてきた肉声による「嘘」の威力は凄まじい。ミュケーナイ・アトレウス王朝の悲劇は、後のギリシャ悲劇を豊かにしたが、この破滅の力の源泉もアトレウス王妃の虚言⁵⁹である。

ことばとは現実の記号化であるとしたら、ことばこそ究極のテキスト（編まれたもの）である。つまりことばは現実を忠実に反映するものではほとんどないのだから、肉声による虚言、面前の人間を偽る特徴は、ことばの重要な属性⁶⁰であるとさえいえる。意図的虚言でなくともことばのやりとりには誤解がつきものだ。ネストールのことばが傾聴されたのは、嘘が排除され真実のみに輝くことばが、誰もが賞賛する輝く戦歴をもった老王の口から出るからである。ことばの真実を支えているのは内容よりもむしろ人格なのだ。ルヴェ教授の「ゲレーニオス」＝「声に真実をもつ」という説は従来の素性の不確かな地名説と違って、ネストールのことばのコンテキストに見事に合致している。

手紙状のものを運ぶ話は、ベレロポンテースの挿話を除くとホメーロス作品には存在しない。それではことばはふつうどのような運ばれ方をしたのか？手にする者に発言権を付与する笏杖については以前論じたことがある⁶¹ので、今回はこの使者と王が持つ杖についてではなく、ホメーロス作品のなかの、笏杖以外の伝言のありかたについて述べてみたい。

ホメーロスの世界では、不在の第三者にことばを伝えようとするときは使者をたてる。使者はその第三者のところへおもむき、伝えられたことばを、人称を変えるだけで正確に伝える⁶²。伝えるべきことばを聴いた使者は話す者となり、

⁵⁹ 一説では、アトレウスの妻アエロペーは夫を裏切り、王権のしるしである金毛皮（羊）を義弟のテュエステースに渡してしまう。その後この兄弟の間でおどろおどろしい近親同士の殺し合いが行われる。アトレウスはテュエステースの子アイギストスに殺され、このアイギストスはのちにトロイア戦争から帰還したアガメムノンをも殺し、その子オレステースに殺される。

⁶⁰ 始終虚言を吐くオデュッセウスも古いことばの伝統に従っているのである。

⁶¹ 「王の笏杖 … 古代ギリシャにおける一人称」『声』一九九八年 白水社。

⁶² 『イーリアス』第九巻のアガメムノンからアキレウスへの使者オデュッセウスのことばは、命じた者（アガメムノン）の一人称（私）を三人称（彼）に変えただけのものだが、例外的に、意味をとってかなり違う言い方をする部

最初に話した（命じた）者は最終的には聴く（報告をうける）者となる。ことばの表明に用いられる物理的方法は「声」であることは言うまでもない。

伝言のもっとも典型的な例である『イーリアス』第九巻の、アガメムノン陣営側からアキレウス側への使節の派遣の場では、使者オデュッセウスのことばはアガメムノンのことばの一人称を三人称に変えたものにほかならない。古典ギリシャ語で動詞の人称は語尾変化であらわすので、アガメムノンがオデュッセウスに伝えたことばと、オデュッセウスがアキレウスに伝えるのことばとの間の違いは、耳で聴く限り、ほんのわずかしかない。

ここで興味をひくのは、ギリシャ軍総大将としてのアガメムノンと、彼の横暴に腹を立てて戦線を離脱しているアキレウス、それにアガメムノン側の使者としてアキレウスのもとにおもむくオデュッセウス三者間での不在者の呼び方である。問題の場面は二つ。一つはアガメムノンとオデュッセウス（他）の場面（不在者はアキレウス）、もう一つはオデュッセウス（他）とアキレウスの場面（不在者はアガメムノン）。後者の場合、条件を提示するオデュッセウスもそれを聴くアキレウスも、不在者アガメムノンの名を、その敬称（アトレイデース）も含め、なんのこだわりなく口の端にのぼらせる。名前使用のタブーはここにはまったく見られない。これに対し、アガメムノンの、アキレウスを戦線復帰させるための譲歩、補償の条件提示の場面では、アガメムノンのことばの中に、その場の不在者、つまりアキレウスへの言及は当然ある。しかし驚くことに総大将アガメムノンはアキレウスという固有名詞を決して口にしないのである。彼の四十八行の口上のなかで、アキレウスを指して用いた六例すべて、「かの、この、自身、あれ、その、彼」という代名詞を用いたわだかまった表現であり、アキレウスという固有名詞そのものは一切用いない。実際、アガメムノンがアキレウスに面と向かって「アキレウス」という語を用いたのは、第一巻一三一行目「神に等しいアキレウスよ」という「アキレウス」の呼格「アキレウ」の用例が一回⁶³あるのみである。呼格は対話的環境、つまり、たとえ極端な場面であっても自然な人間の法（のり）を越えない、聴く

分もないことはない。一二七行目「(私の) 単蹄の馬どもが持って来た褒美 (の品々)」が、伝言スタイル (二六九行目) では、「アガメムノンの馬どもが足で勝ち得た褒美 (の品々)」である。

⁶³ これは『オデュッセイア』二十四巻の冒頭、冥界でアキレウスの亡霊に語るアガメムノンの亡霊の穏やかなことばに見られる「アキレウス」の呼格（アキレウ）の四つの用例（六十一行中）と対照をなす。死はすべてを平等にする。

者にとって安心感のある場で用いられる。第三者が入り込む「テキスト」ではこの安心感は消え失せ、優越するのは客観的な（冷たい）理屈、論理である。

三人称指示代名詞を用いた言い方には、聞き分けのないアキレウスに対する蔑みの含意があきらかにある。三人称の指示代名詞は総大将であるからこそ使えるものなのだ。吟唱師が歌うアガ멤ノーンの口上を聴く聴衆は、奪われたものが返却されるという掟ではなく、力のある略奪者が恣意的に同価値とみなすもので償うという、古い時代にはなかった法のはじまりを知るのである。

文であれ、声であれ、「テキスト」は第三者を生じるが、声による対話的呼びかけと違って、この第三者は不在であるがゆえに実際以上に蔑まれ、あるいは敬われる。現代語において尊敬の三人称表現が存在するのは当然である。肉声の「テキスト」化においては見えないものにたいする誇張と誤解が必ず生じる。

『イーリアス』の冒頭は「女神よ、ペーレウスの息子、アキレウスの怒りを歌え」と、女神への呼びかけ（呼格）から始まる。女神とは芸文詩歌の神ムーサ（単数）のことである。このゼウスの娘は一人とは限らず、複数（ムーサイ）で用いられることもある⁶⁴。吟唱師はこのように女神に歌の靈感を請い、また述べるべき名前を忘れないよう願う。彼らは、日本の恐山の巫女（イタコ）同様、神人一体となり、コトバ（歌）の神に成りかわって歌うのである。柳田国男によればイタコの語源はアイヌ語 *itak*（ことば）である可能性がある。ともかく文字テキスト以前のホメーロス作品は、吟唱師と聴衆、歌の中での吟唱師と神という、歌い手を軸に朗詠の構造が二重になることに特徴がある。声の主を目の前にした聴衆は第三者であるゆえに、吟唱師、登場人物、さらには朗詠の際に呼びかけられた者（この場合は神）と自己を同一化することができる。聴く場合、内容への没入の度合は文字テキストを読む場合よりもはるかに強い。

吟唱師は神のほか、人間にも呼びかける。『イーリアス』ではアキレウス（二十巻）とメネラオス（四巻、七巻）、また十六巻後半、ヘクトールと戦うパトロクロスは何度も二人称で呼びかけられる。三人に対して吟唱師は、『イーリアス』の他の戦士とは異なった親近感をもっていることがわかるが、この特別な親近感も聴衆も共有していたことは間違いない。吟唱師が直接登場人物に呼びかけるのは、もう一人、神でも戦士でもない「豚飼」のエウマイオスがいる。

『オデュッセイア』十四巻はオデュッセウスが二十年の苦難の末、故郷イタ

⁶⁴ 『イーリアス』二巻 四八四 - 四九三行。『オデュッセイア』最終巻では九人。

ケーにたどり着き、忠実な豚飼の家人エウマイオスに会う場面である。エウマイオスは乞食のような風体の男が主人とは気付かないが親切に世話をする。二人はいろいろな話をする。ここで奇妙なことに吟唱師は、豚飼エウマイオスにたいし、「彼（オデュッセウス）に答えて、豚飼エウマイオスよ、お前は言ったな」と二人称で突然呼びかけるのである。このように吟唱師がいきなり一人称の登場人物となり、別の登場人物に話しかける場面が、マーク・エドワーズの好著『《イーリアス》の詩人、ホメーロス』のある章で吟味されている⁶⁵。このエウマイオスの二人称扱いについてエドワーズは大体次のように言っている。

「詩人は、（彼に答えて豚飼のエウマイオスが言った）という表現を、エウマイオスを主格にして韻律的に合うような表現にすることができない。〈ディオス・ヒュポルボス〉（神の豚飼。豚飼エウマイオス、の別の表現）という表現はあるが、詩人は何らかの理由で、呼格形を用いて直接話しかけようとしたのだろう。理由が何であれ、呼格形エウマイオスの場合は、表現は化石化しすぎて大きな効果はなにもないように見える」。

十九世紀後半にホメーロスを訳したルコント・ド・リールの仏訳⁶⁶ではこの場面は「彼に答えて豚飼のエウマイオスは言った」と三人称に訳している。しかし原文では、呼びかけに「エウマイエ」という呼格形を用い、「（答えて）言った」の動詞は「プロセペース」とあるので三人称に間違えようがない。ルコント・ド・リールのように三人称に解釈するためには「プロセペー・エウマイオス」でなくてはならない。三人称の主格表現による言い方が無理なので、韻律上の要請から二人称が生じた、というエドワーズの主張は受け入れられない。

「プロセペース・エウマイエ」（二人称）であっても、「プロセペー・エウマイオス」（三人称）であっても韻律数は同じである⁶⁷。この十四巻では、三人称主格形の「豚飼エウマイオスが（彼に答えて）言った」という言い方が三回に

⁶⁵ Mark W. Edwards *Homer, poet of the Iliad* 1987 The Johns Hopkins University Press USA Chap I - 2 Narrative : The poet's Voice p. 37

⁶⁶ 参照した版は一九九八年、パリ Classiques Antiques のポケット判。

⁶⁷ Ton d'apa/meibome/nos prose/phês Eu/maie su/bôta という呼格を用いた文の切り方は、三人称主格形にすると Ton d'apa/meibome/nos prose/phê・Eu/maios・su/bôtês となり、母音が衝突したり、子音が重なったりでたしかに韻律的にうまくいかない。しかし韻律は別の語順、表現で解決されうるから、この二人称を韻律の要請で説明するのは無理である。実際、主格形で言われている三例のうちの一つは...prose/phônee/ Dîos hu/phorbos（四〇一行）と prosphêmi ではなく、prosphônêo という同義の語を用いて三人称表現を成功させている。

たいし、二人称呼びかけで言われているもの「豚飼エウマイオスよ、(彼に答えて) お前は言ったな」は五例もある。

神、あるいは戦士に対する呼びかけではなく、従者階層の登場人物にたいするこうした吟唱師の呼びかけこそ、この作品が長いあいだ視覚的伴奏を伴った「声のテキスト」であったことを示すものである。吟唱師は作中登場する吟唱師デーモドコス⁶⁸やペーミオス⁶⁹の分身であり、高貴な豚飼⁷⁰は現実の吟唱師に称呼される。こうした「声のテキスト」は書かれた文字テキストとは異なり、歌われる世界にたいする強い共感と一体感を聴衆にもたらすのである。

ホメーロスが紀元前九世紀から前八世紀にかけて存在した、ということは現在、文学史上の事実とされている。歌われている内容の多くは、ホメーロスの時代の数百年以上前に起こったことである。紀元前十三世紀末、ミュケーナイ時代の末期にトロイア戦争と呼ばれる戦争があった。この戦争に関する二伝承が書き記されたのは前六世紀とされるが作品の実体は詠唱である。プラトンが『国家』のなかで警告したホメーロスの害毒は文字テキストではなくこの演劇的「詠唱」の中にあつた。ほぼ今日見るような文字テキストができたのが紀元前三世紀である。文字に頼らない声による「ホメーロス・テキスト」は千年近くも続いたことになる。現在、ホメーロス読解には文字テキストだけでは不十分であり、声で伝えられたテキストを思い浮かべる必要がある。 八月十五日

⁶⁸ 『オデュッセイア』 盲目にされ歌を得た (八巻) アルキノオス宮廷の吟唱師。

⁶⁹ 『オデュッセウス』 テーレマコス宮廷の独修の歌い手。最後の殺戮を逃れる。

⁷⁰ 「豚飼」に「下賤な者」という含意はない。シュリエー島の二つの町の統治者の父をもつエウマイオスは、幼時にポイニキア人にさらわれ、イタケーのオデュッセウスの父に買われた。『オデュッセイア』 十五巻 四〇三 - 四八四